日本最大のキノコ（子実体）「ニオウシメジ（仁王占地）」

―キノコは世界最大の生物？―

投稿：宮井　正彦

今年（2019）の梅雨は実に雨が多かった。梅雨明けが遅い長梅雨であった。関東の梅雨入りは６月７日（平年６月８日）、梅雨明けは７月２９日（平年７月２１日）で、この期間の降雨量は東京で４１８ミリ（平年２９３ミリ）であった。

キノコには大変恵まれた環境となり、この期間はキノコの種類も発生量が多かった。

東京都の某所で、日本最大のキノコと云われる「ニオウシメジ」を見ることが出来た。

*2019.7/26　東京都　撮影

写真をご覧戴きたい。親指と人差指間が約 15ｃｍであることから、キノコ株の大きさが、お判り戴けると思う。１株で１０ｋｇを超すものはざらで、１００ｋｇを超えるものもある（１８０ｋｇという記録がある。）。実に巨大で日本一大きいキノコである。こんな株が７~８株発生しており、実に壮観であった。

和名：「ニオウシメジ」（学名：*Macrocybe　gigantean* ）はキシメジ科ニオウシメジ属の非菌根性の腐生菌で熱帯性キノコと云われる。日本での分布は群馬県以南とされている（過ってはキシメジ属；*Tricholoma* とされていた。）。生体には青酸（シアン）性の毒があると云われるが、加熱すれば毒成分は消えると云う。早速、写真の量を自宅で試食してみた。

**2019.7/26　東京都某所にて撮影

生体は粉臭が強く、傘は壊れやすく、美味そうには見えない。シアン性の毒を除去するために茹で溢しを行い、水切りすると、粉臭の厭な臭いはきれいに消えた。またキノコの肉もシャキッとした。塩と胡椒の味付けでオリーブ油ソテーにした。食感は、歯触りはシャキシャキして癖のない美味であった。「ハタケシメジ」に優るとも劣らぬ味わいであった。日頃は手を出さぬ妻も「美味しいキノコだわネ。」と食した。旨いキノコである。

ところで、１９９２年の科学雑誌「ネーチャー」に、世界一大きな生物はキノコの「ヤワナラタケ」である旨の記事が発表された。米国ミシガン州の「広葉樹林１５ｈａ」に広がる「ヤワナラタケ」は、菌糸推定重量「１００トン」、繁殖速度から年齢を「１５００歳」と推定された。さらに１９９８年には、この記録を大幅に破る「オニナラタケ」が米国オレゴン州で発見され報告された。「広葉樹林８９０ｈａ」の面積を持ち、重量「６００トン」、年齢「２４００歳」と推定され、「世界最大の生き物」はこの「オニナラタケ」とされた。採取したすべての菌糸が同じ DNA を持っているため「同一の生物」と解釈され、世界最大になったのである。

小生はこの記事には疑問がある。菌類は糸状菌と云われる通り、先端だけが伸長する糸状筒型で、体表面積が大きい酵素分解や養分吸収を効率的に行う構造の生物である。細胞の先端から約２～１０％のみが活性細胞である。「先端伸長と菌糸の分枝・吻合及び基質の酵素分解（先端ゾーン）」と「細胞内に吸収しその養分を同化・異化作用により生存に必須な物質に変換する（吸収ゾーン）」と「流転しそれ蓄積する（貯蔵ゾーン）」の構造となっている。それに続く「役割を終えた多くの老化細胞は、自己融解され、その構成成分は新しい先端伸長物質・エネルギーとして先端へ流転される（老衰ゾーン）」である。従属栄養

に依存する菌類にとって、自食のリサイクル活動は大きな生命維持の支えになっている。先端の伸長細胞が四方八方に広がる一方で、「オートファージ」（「自食」）により古い細胞の部分がどんどん分解される。従って、同じ DNA のクローンが離れた場所で見つかるのは不思議なことではない。根状菌糸束を持つ「ナラタケ菌」と云えども、古い細胞を抱えての巨大なマット状菌床を造ることは不可能である。同一 DNA の菌糸が拡大と縮小を繰り返す中、適材適所に広域に分散して生存しているということである。現地で広域にナラタケ病による樹木が枯死したとの報告も無い。ナラタケは短視的には森林の三大病害菌であり、寄生・殺生・根株心材腐（白色）朽菌として怖れられているが、ダイナミックな自然の環境下では、基質（樹木）とナラタケ菌は長い歴史の中、生かさず殺さずの安定した関係が成立しており、それ故に「ナラタケ」は長命なのだろう。「ナラタケ」自身も「オニノヤガラ」や「ツチアケビ」に完全寄生される。「タマウラベニタケ」とは、どちらが寄生者か宿主なのか曖昧な関係でもある。自然の摂理は複雑怪奇なのである。

「ナラタケが世界最大のキノコ」の記事は面白いが、やや無理があると思うのは、小生ばかりだろうか。

因みに、１個体として、世界で最も大きいキノコは「セイヨウオニフスベ（*Calvatia gigantea*：ジャイアントパフボール)」だそうだ。直径が大きなもので１５０ｃｍもあるそうだ。小生の見た日本産の「オニフスベ」の写真を掲載する。直径３０ｃｍ以上であった。

***2001.8/13 長野県　.撮影　　以上